

ビジョンは幻ではないが実行意志の手前にある。現実の問題を離れて自由に思考をめぐらすことはできるが、その可能性の範囲についてはおのずから束縛がある。あるときは過去において試みてできなかったことが再び期待として浮び上り、またあるときは多年迷い続けたことが突然自信をもって巨大な姿を現わす。それらはいろいろのものの混合ではあるが、一つのまとまりを持たなければならないという強い使命感に貫ぬかれている。描かれた像の中には新旧のアンバランスがある。また虚像と実像の重なりがある。それらが現時点の画面に投影されたものを見ると、まことに不調和であるが、その中に何となし魅力がある。それがビジョンの味であり、また弱味でもある。

しかし、われわれはビジョンを持たなければならない。それは、ビジョンが技術の発達にも役に立つと思うからである。

話を現実に移してみたい。卒直に言って、今日のわれわれの関係する技術の発達の段階は素晴らしいと思う。特に今から 20 年前、戦後のあの状態において、果たして今日の姿を予想したであろうか。土木技術史的に見ても、1947 年にはカスリン台風による大災害があり、わが国においてダンプトラックが始めてその復旧に使用されており、また橋梁技術としてはこの時代に板桁架換機が設計され、また全溶接鉄道桁の静的破壊試験が実施されている。

今日はどうかであるか。最近の 6 年間の統計によれば、製造工業の生産指数は 2.5 倍というめざましい伸びを示しており、セメントにおいて 2.2 倍、発電量において 2.1 倍といういずれもいちじるしい発達をみせている。土木構造物としては黒四のダムが完成し、新幹線鉄道、名神高速道路等の近代的施設ができ、さらに引続いて多くの計画が進められようとしている。まことに結構で喜べき話であるが、果たしてこれらが技術の真の発達であったと考えてよいであろうか。もちろん技術の発達進歩があったことは事実であるが、しかしそれは何によって導かれたものであったか。

われわれは、素朴に技術が生産のための間接的手段であることを知っている。敗戦後という特別な社会的条件のもとに始まり、多くの経済的環境と段階において技術は献身的な奉仕を行なった。その結果、世界にもまれに

見るような素晴らしい経済の成長がみられ、また土木技術的にも前述のような進歩を示したのである。このような成長や進歩を導いたものは、ときに国際状況であり社会的環境であるが、総体としては「経済」によって代表された国力の回復、または伸長政策であった。1958 年に政府は新長期経済計画を策定して、産業のあい路打破の目標を示し、また 1961 年には国民所得倍增計画を立てて国民に長期的なビジョンを明らかにした。国の公共的事業もそれらの方針にしたがって投資規模のわくを決められ、それぞれの長期的計画をもつようになった。ケインズ流経済の繁栄を誇示するがごとく、各部門はいずれも華やかな展開と進歩を示した。技術の各分野においても、機械集計や電気計算の偉大な協力を得て、これまではできなかった設計や計算が迅速に行なわれるようになり、飛躍的な進展をみることができた。技術と経済の融合がここにあった。しかしこの融合の多くは、技術の経済への従属という形によって達成せられた。このような形は今日なお依然として続いている。そして、さらに新しい段階に向かってつぎの長期的計画が立てられようとしている。

長期的計画をめぐってビジョン論の幕はあげられた。いろいろな姿を粧って、未来図が華やかにわれわれの前に登場してくる。それらはまさに花の咲き乱れるがごとく自由で楽しい。将来の国民生活の水準は、いかにあるべきか。未来の過大な都市人口を、いかに巧妙に分散させるか。時間的距離はどのように変貌するか。われわれの個人生活はいかに優雅なものになるか——これらを自由闊達に思いめぐらすことはまことに楽しい限りである。それもよい。しかしここで提言したいことはもう少し固い話である。それは技術者がもっとこの問題に積極的に参加すべきであるということである。われわれが技術の立場から、ここまでは延ばしうと思われること、あるいは延ばしてみたいと考えている未来図を描いてみたらということである。政治とか経済ということに一応捉われず、といって現在の技術の発展段階をふみはずすことなく、われわれが社会に貢献する未来の段階を夢みることは大変重要なことと思う。ビジョン論はむしろ技術的に扱わなければならないので、技術者はもっとこの分野にふみ込むべきものと思う。土木技術の分野では特にその社会的意義は大きい。かくすることによって、土木技術は生産のための直接的手段にもなることができるのである。ビジョン論に技術的整風をとというのが筆者の提言である。

* 正会員 建設省技監